

## 45 済生学舎の山田良叔講師と山田訳

## 「蘭氏生理学」について

岩崎 一・殿崎正明・唐沢信安

日本医科大学

## 〔一〕はじめに

済生学舎の卒業生には卒後その活躍の場を学外に求めて大成した者も少なくないが、今回は舎長の長谷川泰を助けてその生涯を終えた済生学舎三期生（明治十二年卒）山田良叔やまだりょうしゅくについてその隠れた功績を偲ぶとともに代表的な著作「蘭氏生理学」らんしの考察を試みた。（日本医科大学同窓会報二七七号）

## 〔二〕山田良叔の人となり

山田良叔は佐竹藩（秋田県）医山田良伯の子として安政五年五月三十一日出生、幼児から神童と謳われていたが明治十年済生学舎に十九歳で入学、明治十二年八月医術開業試験に合格した。在学中は全てドイツ語の原書で学習したという。試験委員長だった長谷川泰

は山田の異才に驚嘆して直ちに済生学舎の幹事に登用したと伝えられている。其の後一貫して長谷川を助け経営に携わり乍ら専ら教師として後進の教育に努めた。優れた語学力をいかして多くの翻訳書を出版し学生の教育に努めた。教場では名講師として生理学、病理学、法医学、薬物学を講義した。著作では「病理学通論」上下二冊、「蘭氏生理学」上中下三冊は特に著名で済生学舎内外の学生に愛読された。特筆すべきは明治二十六年一月から毎月「済生学舎医事新報」を発行した事である。多忙の中にも倦む事なく創刊号から廃校に至る明治三十六年八月迄欠号せず百二十八冊を刊行した。同誌は全国の卒業生に医学の新知識の紹介、済生学舎再生の臨床講義の速記、更に学内報として舎長の長谷川泰の各所での演説や学内試験問題、医術開業試験の結果等いわば済生学舎の機関誌としての役目を果たしている。当時の医界の情勢を伝える貴重な資料でもある。

## 〔三〕山田良叔の著書「蘭子生理学」について

原著はドイツの「グライフスワルト」府医科大学教

頭生理学博士ランドアが生理学の実施的知識を与えんが為に著述したもので、生理学とは生物の生活現象を論及する学にしてその本旨は生活現象を詳明し規則及原因を確定し之を理学及化学の通則に照合するに在るとしている。今回は明治三十一年発行の山田訳第六版(巻下)を検討したが山田は原著が改版される毎に改訂していた。因みにランドアは自著の第十版出版後他界(一九〇〇年)したがその死後も助手のローゼマンの訂正により出版はなお続いていた。一九〇九年発行の第十二版迄に日本も含め世界八ヶ国で出版された名著である。内容は現代生理学書にかなり近いが、自律神経の項目は特になく、交感神経にはかなり記述があるが副交感神経にはそれ程明確でない。迷走神経の項で現在に近い解釈と説明がある。検査法、検査器具の説明は少いが専ら解剖学的に説明した精緻な図がある。山田の代表的な力作のひとつである。

#### (四) おわりに

「資性狷介ケンカイ容易二人ト交ラズ然レドモ固ト温良共謙ニシテ」という弔辞(東京医事新誌第一四九号)は山

田の一面でもあろうが済生学舎で講義を受けた吉岡弥生(東京女子医大創立者)は「生理学の山田先生の講義はわかりやすいが帝大出身の若手講師と比較して独学者特有の味のある講義だった。」と述べている。明治三十五年頃から胸部疾患に冒され神奈川県府津に転地療養をしながら翻訳を続けていた山田に舎長の長谷川泰から突然済生学舎廃校の通知があったのは実に廃校前日の明治三十六年八月二十九日であった。其の後私立日本医学校に生理学講師として招聘されたが健康は回復せず遂に明治四十年一月二十一日、五十歳の生涯を閉じた。

隠れた功労者として生涯を済生学舎、日本医学校、日本医科大学への懸け橋として終えた山田良叔の功績は大きい。日本医科大学史上忘れる事の出来ない人物である。